

釈迦とキリストの患者の治療の実態について

杉田暉道

新興の宗教が病気を治すことによつて、信仰上の權威を獲得し、それによつて信者をふやしていくという図式は、ほとんどあらゆる社会、時代にも通用する。

演者はこの点について仏教を創始した釈迦とキリスト教を創始したキリストについて、比較検討を行い興味ある結果が得られたので報告する。

釈迦が出家するにいたつた動機については、一、釈迦の内向的性格、二、人生の生病死の無常を超越した精神的安らぎを得ようとしたが定説であるが、演者はこれに疫病による突然の死亡を加えたい。これはガンジス河流域は古代から世界の中でも有数の疫病多発地域でこれによる突然の死亡者も想像以上に多く、これによるショックは極めて大であつたと考えられるからである。

釈迦は出家して六年後三五歳で大悟成道し覺者となつた。この時釈迦は自分の悟つた仏教の内容が庶民には難解であるので、これを広く説こうとしなかつた。しかし最初の六人の弟子の熱心な説得によつて仏教を広めようと決心したのである。そして仏教を広めることについては何の障害もなかつた。なぜなれば当時のガンジス河主流の地域は、上流より移住してきたアーリヤ人は先住民族と盛んに混血して新たな民族となり、アーリヤ民族の伝統的な風習儀礼を守らず、ヴェーダ文化を無視して、自由に発言し行動した。かれらの定住した地方は地味肥沃で多量の農産物を産出したために、商工業が盛んとなつた。かくして新しい時代の動きに応じて、唯物論者、懷疑論者、快樂論者などが現われたが、思想の自由および発表の自由が極度に容認されていたので、仏教を広めることについては何の抵抗もなかつた。

仏教医学は、仏教教団の出家僧の健康保持とくに疫病の予防および疾病治療のためのものであつて、庶民のためのもではなかつた。したがつて、出家僧が教団に入団するには先ず厳しい健康チェックを受け、その結果身

体に異常がないと認められて始めて入団が許可された。

さらに自然に存在するすべての生物を薬物と考えて、時薬、夜分薬、七日薬、尽寿薬に分類し、その摂取方法を詳細に解説していた。釈迦は出家僧に対して頼まれれば治療を行ったが、自ら積極的には行わなかった。

キリストについてみると、釈迦とは背景が全く異っていた。古代ユダヤは紀元前六世紀以後外国人の支配を受けていたので、ユダヤ民族の危機感が強くなった。さらにユダヤ教が住民の生活すべてを支配し、ある特定の病気は神の呪いやけがれとして社会的制裁の対象となり、一連の医療行為は集中的に祭司の手で行われた。このように病気に宗教的意味を強制し、人々を恐怖におとしされる時代となった。かくして紀元前二世紀頃からメシヤ（救世主）による神の国の到来を予告する特殊な文書が多く見られるにいたった。これらの文書の内容は、一、地震、疫病などのあらゆる災厄の消滅、二、モーセが荒野で行ったような奇跡を行うメシヤの出現、三、神の国の建国（エルサレムと神殿を清め、ユダヤ民族の他民族への君臨、メシヤの政治的支配、貧しい人々への富の配分などを

行う国をつくる）、四、死者の復活、五、神の審判により正しい人に永遠の幸福を与え、不信仰な人に永遠の劫火を与える、というものであった。このような時期にキリストが誕生したのである。したがって彼は必然的にユダヤ教に代わる新しい宗教、即ちキリスト教を開く義務を負っていた。これを実行するために彼は積極的に病人の治療活動を行った。しかし彼の治療活動は、病気そのものを治すよりも、ユダヤ社会が病気に強制した社会的意味をうち砕く闘いであった。キリストが手がけた病人の中で悪霊につかれた者、盲人およびらい病が極めて多いのは前記のことを証明している。キリストはこれらの病人が「精神的な牢獄」によって生きしかばねのように扱われていたのを解放したのである。キリストは病人をけがれた者や罪人のように扱わなかった。そして言った。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしが来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と。

（神奈川県予防医学協会）